



Title	朝鮮語における漢語の読み方について
Author(s)	水野, 義明
Citation	明治大学教養論集, 61: (1)-(17)
URL	http://hdl.handle.net/10291/8780
Rights	
Issue Date	1970-01-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

朝鮮語における漢語の読み方について

水野 義明

I. はじめに

日本語と朝鮮語とは、その文法構造、思考様式が驚くほど似ているが、漢語の豊富な点でも共通している。(ここで「漢語」というのは、漢字を使用した語句という程度の意味で、古く中国に由来するものほかに、近世以後新しく用いられるようになったものを含み、漢字に音訳された外国の地名、人名、外来語などは除いている。)たとえば、「学校」「鉛筆」「自動車」「食堂」「時計」「試験」「電話」など、日朝両語で全く同様に使われる語彙が非常に多い。これらの語は、朝鮮語では、それぞれ、「ハッキョー」「ヨンピル」「チャドンチャ」「シットン」「シギェ」「シホム」「チョーノア」と読まれている。これを、日本語の読み方と比べると、かなり異なっていて、漢字が使われていないと普通は理解できない。しかし、実情は、これらの日常の語彙も含めて、できるだけ漢字の使用を避けようとする傾向が、現代の韓国では強い。漢字の代わりに、「ハングル」と呼ばれる、日本の仮名に相当する固有の表音文字を用いるのである。したがって、われわれ日本人が現代朝鮮語を研究しようとするれば、朝鮮固有の漢字の読み方を知ることが、重要な問題となってくる。この論文の目的は、朝鮮語の漢字、漢語の読み方を、日本語と比較しながら、実例について検討し、いくつかの主な傾向を指摘するところにある。

朝鮮音の表記には、本来ハングルを用いるべきであるが、本稿では便宜上通例の発音符号による音韻表記の方法を採用した。ハングルの表わす一音、一音をそのまま転字したのは、語としての統一性を示すためである。しかし実際の

発音は、この転字と必ずしも一致しないので、必要な場合には実際の発音をも附記し、これを [] に入れて示した。たとえば、

(漢 字)	(ハンゲルの転字)	(発 音)
航 空 路	/haŋ-kop-ro/	[haŋ-gop-no]
沐 浴	/mok-jok/	[mo-gjo ^k]
十 年	/sip-njon/	[sim-njon]
失 礼	/sil-lje/	[sil-nje]

なお、表記にあたっては、宋 枝学編「朝鮮語小辞典」(1962, 大学書林), 宋枝学編「日朝会話練習帖」(1958, 大学書林)に依拠したが、一部これと異なるところもある。英語などの発音表記に、通常あまり用いられない記号とその音価は、次の通りである。

[母 音]

/w̥/ 中間母音、口を横に平たくして発音、日本語の「すみ」「すし」のウ音に近い。

/ø/ 円唇音、ドイツ語の ö に近い、/we/ とも発音される。

/y/ 円唇音、フランス語の /y/ に近い、/wi/ とも発音される。

/wi̯/ /w̥/ と /i/ との合成母音、ロシア語の ы に近い。

[子音その他]

/p/, /t/, /k/, /tʃ/ 英語の場合と同じであるが、氣息 aspiration を伴わない点に注意が必要。

/pʰ/, /tʰ/, /kʰ/, /tʃʰ/ 上記の各音が氣息を伴う場合。(激音)

/p²/, /t²/, /k²/, /tʃ²/ 上記の各音が強く発音される場合。(濃音)

次の各語を音節で切って読むときの、下線部の音に近い。

/p²/ bub-ble, rub-bing, cup-board

/t²/ dead-dog, rid-dle, dad-dy

/k²/ beg-gar, gig-gle, big goat

/tʃ²/ rich Joe, Scotch giant, church job

/k̥/, /t̥/, /s̥/, など 調音の位置にあるのみで、実際は無声。

/n/, ɳ/ など 主として日本語表記の際の、一音節として数えられる撥音、促音を示す。

Ⅱ. 朝鮮語の漢語の読み方

現代朝鮮語の漢語の読み方を、日本語のそれと比べると、次のような点に気がつく。

1. 漢字は原則として、一字一音で、一音節に読まれる。
2. 同音異義語が比較的少ない。
3. 漢語を構成する個々の漢字の読みの間には、音便作用が活潑である。
4. 主として語頭の r 音が脱落、変音する傾向が強い。
5. 漢字の読みに独得の長短の差がある。

以下に各項目について検討することにする。

1. 一字一音の原則 朝鮮語では、「山」「日」「水」「書」「人」などは、常に /san/, /il/, /su/, /so, /in/ と読まれる。日本語のように、これらの漢字を訓読みしないのが第一の特色であり、また同じ中国音に基きながらも、呉音、漢音、唐宋音など多様な読み方をしないことが、第二の特色である。したがって、「株式会社」「葉書」「手形」「立場」「手当」「小包」「身分(みぶん)」などは、それぞれ日本語式に言うと、

「シュシキカイシャ」「ヨウショ」「シュケイ」「リツジョウ」「シュトウ」「シヨウボウ」「シンブン」のように読まれ、それが日用語となっている。

しかし例外も存在する。以下はその若干の例である。漢字、普通のハンゲル転字、特殊な読み漢語、その転字、意味の順に示してある。

「行」/hæŋ/ 「行市」/haŋ-si/ (臨時の店舗, 市価), 「行伍出身」/haŋ-otʃʊl-sin/ (微賤の兵卒から出世すること)

「殺」/sal/ 「殺到」/swæ-to/ (殺到)

「大」/tæ/ 「大廟」/t'æ-mjo/ (王や諸侯の始祖の祠堂), 「大僕」/t'æ-pok/ (周代の官職の名)

「惡」/ak/ 「惡心」/o-sim/ (むかつき), 「惡感」/o-han/ (さむけ)

「茶」/ta/ 「茶母」/tʃ'a-mo/ (官婢のひとつ), 「茶盤」/tʃ'a-pan/ (茶器をのせておく小さな円盆)

「金」/kwɨm/ 「金達寿」/kim-tal-su/ (人名)

これらの例外的読み方があるにもかかわらず、朝鮮語の漢語の読みは、日本語に比べると概して遥かに規則的である。たとえば、「重大」と「重陽」, 「決定」と「評定 (会議の意味で)」, 「文学」と「文句」などの「重」「定」「文」はいずれも、/tʃun/, /tʃɔŋ/, /mun/ である。また日本語では仏教用語の中に特殊な読み方をするものが多いが、朝鮮語はこの点についても、きわめて規則的である。以下に挙げた漢語の各組のうち、下線を引いた漢字の読みは、一様に通例の発音である。

發達, 發足, 發心	/pal/
殺人, 殺生	/sal/
解答, 解脱	/hæ:/
進言, 真言	/ɔn/
人生, 衆生	/sæŋ/
礼儀, 礼讚	/je/

2. 同音異義語が少ない 朝鮮語では日本語の場合よりも遥かに多様な漢字の読み方が可能である。その原因は、もっぱら、両国語の音韻構造の違いにある。第一に、朝鮮語では母音、子音を合わせて音素の数が日本語よりも多い。特に母音は、単母音、合成母音など合わせると21個であるのに対し、日本語では /w/ や /j/ を伴う音節を複合母音として計算しても僅かに9個である。第二に、朝鮮語では、閉音節が可能である。したがって /k/, /l/, /m/, /n/, /p/, /ŋ/ などが音節の終りに来ることができ、上述の豊富な母音と結合して、漢字の読み方を多彩にしているのである。

以上のことを、実例についてみると、次のようになる。

(4) 日本語の同音異義語が、朝鮮語では読み分けられる場合 (*は同音語)

(例1) 日本語 /ka-i-ko-o/

漢語	ハングル転字	実際の発音
回航	/hφ-haŋ/	[hφ-haŋ]
怪光	/kφ-kwaŋ/	[kφ-gwaŋ]
改稿	/kæ-ko/	[kæ:-go]
開港	/kæ-haŋ/	[kæ-ha:ŋ]
海港	/hæ-haŋ/	[hæ:-ha:ŋ]
海溝	/hæ-ku/	[hæ:-gu]
邂逅	/hæ-hu/	[hæ:-hu]

(例2) 日本語 /to-o-ki/

冬季	/toŋ-ki/	[to:ŋ-gi]
当季	/taŋ-ki/	*[taŋ-gi]
党紀	/taŋ-ki/	*[taŋ-gi]
党規	/taŋ-kju/	[taŋ-gju]
投棄	/t'u-ki/	*[t'u-gi]
投機	/t'u-ki/	*[t'u-gi]
登記	/t'wŋ-ki/	[t'wŋ-gi]
騰貴	/t'wŋ-kwi/	[t'wŋ-gwi:]
陶器	/to-ki/	[to-gi]

(例3) 日本語 /se-i-ka/

成果	/sɔŋ-kwa/	[sɔŋ-gwa:]
青果	/tʃ'ɔŋ-kwa/	[tʃ'ɔŋ-gwa:]
声価	/sɔŋ-ka/	[sɔŋ-ga]
正価	/tʃɔŋ-ka/	[tʃɔ:ŋ-ga]
正貨	/tʃɔŋ-hwa/	[tʃɔ:ŋ-hwa]
正課	/tʃɔŋ-kwa/	[tʃɔ:ŋ-gwa]
生花	/sæŋ-hwa/	[sæŋ-hwa]

生 家	/sæŋ-ka/	[sæŋ-ga]
盛 夏	/sɔŋ-ha/	[sɔŋ-ha]
精 華	/tʃɔŋ-hwa/	[tʃɔŋ-hwa]
聖 火	/sɔŋ-hwa/	[sɔŋ-hwa]
聖 歌	/sɔŋ-ka/	[sɔŋ-ga]
製 菓	/tʃe-kwa/	[tʃe:gwa]
製 靴	/tʃe-hwa/	[tʃe:hwa]
請 暇	/tʃ'ɔŋ-ka/	[tʃ'ɔŋ-ga]

これら三例は、「岩波国語辞典」から任意に借用したものであるが、日本語ではそれぞれ同音となるのに対し、朝鮮語では、*印をつけた「当季」と「党紀」、「投棄」と「投機」が同音となるのみである。

(㊦) 朝鮮語の同音異義語が、日本語では読み分けられる場合

(例1) 朝鮮語 /kjɔŋ-tʃo/

漢 字	意 味	日本語
京 調	ソウルの風習	ケイチョウ 又は キョウチョウ
京 兆	ソウル	
軽 躁	軽 率	ケイソウ
軽 燥	軽く乾いている	ケイソウ
軽 佻	言動が軽率なこと	ケイチョウ

(例2) 朝鮮語 /hæ-ku/

海 区	海上に設定した区域	カイク
海 口	港の入口	カイコウ
海 寇	海より来る賊	カイコウ
海 狗	水 狗	カイク
海 鷗	かもめ	カイオウ
海 溝	海 溝	カイコウ

以上は、漢韓辞典より任意に取り出した例である。朝鮮語にもたしかに同音異義の漢語が多いが、日本語よりもずっと少ない。たとえば、(㊦) (例1) に

については、「敬弔」「慶弔」はいずれも日本語で「ケイチョウ」となり区別がつかないが、朝鮮語では [kjo:ŋ-dzo] であって、「京調」以下の語とは異なっている。またハングルでは同様であっても、長母音 [ɔ:] を有することによって、「正気」「政機」と「精気」「旌旗」とは区別されるのである。

このような相違が生じてきた原因は、日本語と朝鮮語が、中国の漢字音のうちどの時代のもを採用したかということも関係があるが（日本語の場合は、漢字文化の渡来が数回に亘って行なわれたので、呉音、漢音、唐宋音などが併存するようになったが、朝鮮語の漢字音は、十世紀頃の宋音に基いているとされる。有坂秀世《国語音韻史の研究》p.316）、それよりも、日朝両語の音韻構造の違いが更に大きな役割を演じている。つまり、漢字は、その渡来の初期には、日本でも朝鮮でも、シナの原音に従って読まれたのであるが、時代を経るにつれて、それぞれの言語の音韻構造に適応、調和するようになったのである。

この場合、朝鮮語では、前述のように、閉音節が可能であり、複合母音など音韻数も豊富であるために、漢字の読み方も比較的良好に原音の名残りを留めている。これに対して、日本語では、閉音節が存在せず、合成母音は二個の母音として取扱われ、長音は二音節と数えられ、撥音、促音も音節化する傾向がある。このため、現在では、個々の漢字の読み方にも、両国語では次のような著しい違いが生じている。

1. 開音節

漢字	ハングル転字	日本語音韻表記
愛, 改, 大	/æ/, /kæ/, /tæ/	/a-i/, /ka-i/, /da-i/
外, 会, 衰	/φ/, /hφ/, /sφ/	/ga-i/, /ka-i/, /su-i/
又は	/we/, /hwe/, /swe/	
衛, 就	/y/, /tʃ'y/	/e-i/, /ʃu-u/
又は	/wi/, /tʃ'wi/	
麗	/jo/	/re-i/
揺, 交, 表	/jo/, /kjo/, /p'jo/	/jo-o/, /ko-o/, /hjo-o/
類, 閩, 携	/ju/, /kju/, /hju/	/ru-i/, /ke-i/, /ke-i/

界, 例, 芸	/kje/, /je/, /je/	/ka-i/, /re-i/, /ge-i/
快, 刷, 矮	/k'wæ/, /swæ/, /wæ/	/ka-i/, /sa-tsu/, /a-i/
潰	/kwe/	/ka-i/

2. 閉音節

イ 日本語で長音化

康, 堂, 能	/kaŋ/, /taŋ/, /nŋŋ/	/ko-o/, /do-o/, /no-o/
---------	---------------------	------------------------

ロ 日本語で撥音化

安, 田, 心	/an/, /tʃɔn/, /sim/	/a-ŋ/, /de-ŋ/, /fi-ŋ/
---------	---------------------	-----------------------

ハ いわゆる入声の漢字

発, 達, 日	/pal/, /tal/, /il/	/ha-tsu/, /ta-tsu/, /ni-tʃi/
---------	--------------------	------------------------------

法, 答, 協	/pɔp/, /tap/, /hjɔp/	/ho-o/, /to-o/, /kjo-o/
---------	----------------------	-------------------------

各, 独, 食	/kak/, /tok/, /sik/	/ka-ku/, /do-ku/, /ʃo-ku/
---------	---------------------	---------------------------

したがって、これらの漢字が結合して漢語を作るときは、日朝両者の読み方に大きな違いが生じてくるのは当然である。たとえば、

(漢字, ハングルの転字, 朝鮮語の発音, 日本語の発音の順)

安 心 /an-sim/ [an-sim] [a-ŋ-fi-ŋ]

各 国 /kak-kuk/ [ka-k'u^k] [ka-^k-ko-ku]

能 率 /nŋŋ-rjul/ [nŋŋ-njul] [no-o-ri-tsu]

食 堂 /sik-taŋ/ [si^k-t'aŋ] [ʃo-ku-do-o]

健康増進 /kɔn-kaŋ-tʃŋŋ-tʃin/ [kɔn-gaŋ-dʒŋŋ-dʒin]

[ke-ŋ-ko-o-zo-o-fi-ŋ]

法 学 部 /pɔp-hak-pu/ [pɔ-p'a^k-pu] [ho-o-ŋa-ku-bu]

3. 音便作用 ここで音便作用というのは、主として発音を容易にするため、漢語を構成する個々の漢字の読み方が、元来のものと多少異なってくる現象を指している。たとえば、日本語の

観音 [ka-ŋ-o-ŋ] → [ka-ŋ-no-ŋ]

反応 [ha-ŋ-o-o] → [ha-ŋ-no-o]

などは、その例である。また、

学 校	[ga-ku-ko-o] → [ga- ^h -ko-o]
発 声	[ha-tsu-se-i] → [ha- ^h -se-i]
憲 法	[ke-ŋ-ho-o] → [ke-m-po-o]
深 山	[ʃi-ŋ-sa-ŋ] → [ʃi-ŋ-za-ŋ]
山 河	[sa-ŋ-ka] → [sa-ŋ-ŋa]

なども、この部類に入れてよいであろう。これらの例では連音化、促音化、唇音化、有声音化など各種の音便現象が見られる。しかし、次のような漢語は、音便作用が適用可能であるのに、実際には適用されていない。

「天安門」「反映」「紀行」「価値」「食堂」「植民地」

これらは、朝鮮語式に読むとすれば、次のようになるであろう。

「テナンモン」「ハネイ」「キゴウ」「カヂ」「ショッドウ」「シヨニンヂ」

すなわち、日本語の漢語の読みにおいては、音便作用が、(1)必ずしも一般通則となっていないこと、(2)個々の音の変異の範囲が比較的限定されていること、などが指摘される。これに対して、朝鮮語の場合は、音便作用が通則化されており、また音変異も多種多様である。以下に、石原六三、青山秀夫共編「朝鮮語の学習」(1969年改訂版、養徳社)に基いて、諸例を分類して示すことにする。

1. 連音化

軍 人	/kun-in/ → [ku-nin]
血 圧	/hjoŋ-ap/ → [hjo-la ^p]
英 語	/joŋ-ɔ/ → [jo-ŋɔ]

2. 有声音化

電 気	/tʃɔŋ-ki/ → [tʃɔŋ-gi]
糖 分	/taŋ-pun/ → [taŋ-bun]
商 店	/saŋ-tʃɔŋ/ → [saŋ-dzɔŋ]

次のような例は、/h/の有声化と考えられている。(/h/ → /ɦ/、/h/の黙音化に近い。)

変 化	/pjɔŋ-hwa/ → [pjɔŋ-ɦwa] (ピョーヌア)
-----	---------------------------------

哲学 /tʃɔl-hak/ → [tʃɔl-ɦaʔ] (チョラク)

3. 鼻音化

十万 /sip-man/ → [sim-man]

国民 /kuk-min/ → [kuŋ-min]

駅内 /jɔk-næ/ → [jɔŋ-næ]

次のような例は、この特殊な場合である。

独立 /tok-rip/ → [toŋ-niʔ]

学力 /hak-rjɔk/ → [ɦaŋ-njɔʔ]

法律 /pɔp-rjul/ → [pɔm-njul]

4. 有気音化

閣下 /kak-ha/ → [ka-k'a]

執行 /tʃip-hæŋ/ → [tʃi-p'æŋ]

学会 /hak-hɸ/ → [ɦa-k'ɸ]

5. 舌側音化

叛乱 /pan-lan/ → [pal-lan]

新羅 /sin-la/ → [sil-la]

言論 /ɔn-lon/ → [ɔl-lon]

6. 濃音化

学校 /hak-kjo/ → [ɦa-kʲjo:] (ハッキョー)

立法 /ip-pɔp/ → [i-pʲɔp] (IPPOP)

食堂 /sik-taŋ/ → [siʔ-tʲaŋ] (シッターン)

7. 口蓋音化

失礼 /sil-lje/ → [sil-nje]

活力 /hwal-ljɔk/ → [ɦwal-njɔʔ]

雪量 /sɔl-ljaŋ/ → [sɔl-njaŋ]

(この場合の発音表記は、宋枝学氏の方式に依ったものであるが、石原、青山氏の方式では [sil-ʎe], [ɦwal-ʎɔʔ] などとなる。[ʎ]の方が、口蓋音化という名にふさわしいと思うが、ここでは表記を一貫させるため宋氏の方式をとっ

た。)

日朝両語の漢字の読みにおける音便作用の違いは、やはりそれぞれの音韻構造の違いに由来するものである。この場合、特に閉音節を有するか否かが、大きな問題となる。日本語で連音化が通則とならないのは、語末の *n* が音節としての意識を強固に有するためであり、したがって、たとえば、翻案は /*ho-ŋ-a-n*/ としてとどまり、/ *ho-na-ŋ*/ にはならない。例外的に連音化されるときも、観音 [*ka-ŋ-no-ŋ*], 四天王 [*ʃi-te-ŋ-no-o*] のように、音節としての *n* はどこまでも保存されるのである。また有声音化が通則とならないのは、日本語が開音節的性格をもつために、漢語を一単位として読む場合の読み易さを捨てても、漢語を構成する個々の漢字を語頭の子音とも一音節として常に取り扱おうとする傾向が強い理由によると考えられる。

これに対して、閉音節をもち得る朝鮮語では、子音と子音との接続する機会が多く、個々の音節や単語を言語の定着的単位とするよりも、音節の文中における有意味的結合を言語の基本的単位とする傾向が強い。たとえば、ハンゲルによる朝鮮文では、名詞は常に格助詞等と共に一綴りに分かち書きされている。また時には助詞等が短縮されて、名詞と一緒に一音節（一語）の感を呈することもある。

(例)

私 (/na/) は (/nŋwŋ/) 学校 (/hak-kjo/) へ (/e/) 行った (/kass-ta)。

→ /nanŋwŋ hakkjoe kassta/

私 (/na/) の (/wi/) 本 (/tʃ'æk/) → /næ tʃ'æk /

そんな (/kŋwŋŋ/) こと (/kos/) が (/i/) ある (/iss/) なら (mjŋŋ/)

→ /kŋwŋŋ ke issŋmjŋŋ/(ŋ は閉音節と mjŋŋ とを結ぶ挿入音)

これ (/i kos/) を (/wŋl/) → /i kol/

すなわち、朝鮮語はいわば文節を単位として見るとすることもでき、したがって、各音節や各単語の音相には、日本語に比べてかなりの流動性が存在するので、漢語の読み方についても、このように音便作用が活潑なのではあるまいか。

最後にこの現象を日朝両語についてもう一度比べてみると、(上段は日本語、下段は朝鮮語)

学 校	/ga-ku-ko-o/ → [ga ^k -ko-o]
	/hak-kjo/ → [ha-k ^ʰ jo:]
卓 球	/ta-ku-kju-u/ → [ta ^k -kju-u]
	/tak-ku/ → [ta-k ^ʰ u]
発 達	/ha-tsu-ta-tsu/ → [ha- ^ʰ ta-tsu]
	/pal-tal/ → [pal-dal]
閣 下	/ka-ku-ka/ → [ka ^k -ka]
	/kak-ha/ → [ka-k ^ʰ a]
観 音	/ka-ŋ-o-ŋ/ → [ka-ŋ-no-ŋ]
	/kwan-wŋm/ → [kwa-nwŋm]
深 山	/si-ŋ-sa-ŋ/ → [ʃi-ŋ-za-ŋ]
	/sim-san/ → [sim-san]

このうち、「観音」は、日朝両語の連音化の特色を示し、「深山」は、日本語では音便作用(有声音化)がはたらくが、朝鮮語ではそれが適用されない数少ない例のひとつである。しかし、それ以外の音便作用は、「学校」以下の例に見られるように、日本語では、せいぜい、中間の母音を脱落させて促音化する程度にとどまっている。ごく概略的に言えば、日本語の音便作用が終るところから朝鮮語の音便作用が始まると、言えるのではなからうか。

4. r 音の脱落又は変音 語頭に r 音をもたないのは、日本語、朝鮮語を含めてアルタイ系言語の共通の特色といわれる。しかし、日本語では漢字、漢語を読む際に、語頭の r 音をとり入れているのが普通である。これに対し、朝鮮語では、漢語の語頭の r 音は、規則的に脱落又は変音した。また語頭ではないのに r 音が脱落、変音する例も見られる。しかし近世以降、主として印欧系諸語からの借用語や、外国の人名、地名等には、r 音が日本語と同様に使用されている。以下に、このそれぞれの場合について、実例を挙げることにする。

(例1) 語頭の r 音の脱落

略語 /jak-ɔ/	良俗 /jaŋ-sok/	旅館 /jɔ-kwan/
連帯 /jɔn-tæ/	列車 /jɔl-tʃ'a/	礼法 /je-pɔp/
竜宮 /jɔŋ-kup/	類例 /ju-rje/	理論 /i-ron/
隣国 /in-kuk/	林野 /im-ja/	六芸 /juk-je/

(例2) 語頭の r 音の変音

羅紗 /na-sa/	落胆 /nak-tan/	乱倫 /nan-ljun/
濫作 /nam-tʃak/	来週 /næ-tʃu/	労働 /no-ton/
論文 /non-mun/	累進 /nu-tʃin/	凌駕 /nŵŋ-ka/

(例3) 語頭以外の r 音の脱落, 変音

鐘路 /tʃɔŋ-ro/ → [tʃɔŋ-no] 功劳 /koŋ-ro/ → [koŋ-no]
 同類 /toŋ-rju/ → [toŋ-nju] 命令 /mjɔŋ-rjɔŋ → [mjɔŋ-njɔŋ]

(これについては、音便作用の鼻音化の項で述べたところである。) また次のような例もある。(前の例と異なり、ハングル表記にも反映しているもの。)

精神分裂症 /tʃɔŋ-sin-pun-jɔl-tʃŵŋ/
 民主政治歴史 /min-tʃu-tʃɔŋ-tʃ'i-jɔk-sa/
 民主主義の基本理念 /ki-pon-i-njɔm/
 児童及び婦女子労働法 /pu-njɔ-tʃa-no-ton-pɔp/

(例4) 借用語及び外国の人名地名

radio /ra-ti-o/, lucky /rɔ-k'i/
 logos /ro-ko-sŵ/, ready made /re-ti-me-i-tŵ/
 ruble /ru-u-pŵl/, Louvre /ru-pul/
 reportage (ルポルターージュ) /rŵ-p'o-rŵ-t'a-a-tʃŵ/
 Rome ro-ma/, London /rɔn-tɔn/
 Rumania /ru-mi-ni-ja/, Rhine /ra-in/
 Rabelais /ra-pul-le/, Laski /ræ-sŵ-k'i/
 Lenin /re-nin/, Rothschild /ro-tŵ-tʃ'a-il-tŵ/

古くからとり入れられた外来語の中には、Russia /no-sɔ-a/ のように、r 音が変音しているものもあるが、現在では一般に表音主義の転記法を採用してい

るようである。(ハングル学会制定「ハングル綴字法統一案」第6章。)

なお、r音の脱落、変音について注意すべきことは、この現象が、朝鮮語の不可欠の構成要素としての漢語について見られるのであって、本来は外国語の文字である漢字については見られないということである。たとえば、漢鮮辞典の音訓索引では、「勞」「連」「論」などは、r音の項に配列されている。

最後に興味深いのは、分裂国家である現在の朝鮮では、この点についての態度が南北で異なることである。すなわち、大韓民国では上述のr音の脱落、変音がそのままハングルの表記に反映しているが、朝鮮民主主義人民共和国では、r音をそのまま表記し、またこれを発音しようと努めている点である。この結果、北と南とでは、次のような相違が生じている。

漢語	北の表記	南の表記
労働	/ro-ton/	/no-ton/
落第	/rak-tfe/	/nak-tfe/
歴史	/rjok-sa/	/jok-sa/
旅行	/rjo-hæŋ/	/jo-hæŋ/

現在南北で発行されているほぼ同規模の国語辞典 (①「東亜新国語辞典」1969, 東亜辞書出版社, ソウル, ②「現代朝鮮語辞典」1968, 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院言語学研究所編, 平壤) のrの項を比較すると, ①は13ページ, ②は22ページを割いている。これは①では助詞と外来語のみを採用しているのに対し, ②では更に元来r音で始まる漢語をとり入れているためである。

5. 母音の長短の区別 これについては、すでに触れたのであるが (2. 同音異義語が少ない)、朝鮮語における漢字の読みの長短の区別は、音節の増加ではなく、音素の相違を意味する。また、この際長音の漢字の読みには多少音価が異なってくる場合もある。(例) 健康 [kɔ:n-gaŋ] → [kə:n-gaŋ], 電気 [tʃɔ:n-gi] → [tʃə:n-gi] など。

長短の区別は、ハングルでは、辞書に:を以て示してある以外には普通は特に表記されないが、耳で聞く漢語の区別には多少役立っていると言えよう。

以下に実例を若干示す。

強襲 /kaŋ-swǝp/, 講習 /kaŋ-swǝp/; 婦依 /kwi-wi/, 貴意 /kwi-wi/, 島民 /to-min/, 道民 /to:~min/; 埋伏 /mæ-pok/, 売朴 mæ:pok/; 排水 /pæ-su/, 配水 /pæ:su/; 疝気 /san-ki/, 産気 /sa:n-ki/; 漁具 /ɔ-ku/, 語句 /ɔ:ku/ など。

この現象は、朝鮮語固有の語彙にも見られるところである。(例) /pal/ (すだれ) /pa:l/ (足), /mal/ (ことば) /ma:l/ (ます), /pam/ (くり) /pa:m/ (夜) など。更に、上述の諸例では、長音となる漢字(講, 貴, 道など)が、現代北京語では、すべて第三声または第四声に読まれるという事実も注目に値する。他の漢字についても、この点を検討したところ、朝鮮語で長音読みのものは、北京語では概して第三声、又は第四声(特に多い)になっていることがわかった。もちろん、現代北京語と朝鮮語を直接比較することは無暴であるが、朝鮮語の長音読みの漢字は、渡来当時の中国の漢字の音調と何か関係があることを示唆していると思われる。

これ以外にも、朝鮮語の漢語の読みには、母言の変移する傾向(西洋 /sɔ-jaŋ/ → [se-jaŋ]), 濃音化の傾向(理科 /i-kwa/ → [i'k'wa]), 数学 /su-tʃa/ → [su'tʃ'a]) など種々の特色が指摘されているが、ここでは主要な傾向についてだけ、略述した。

Ⅲ. む す び

これまで、日朝両語における漢語の読み方について、五項目に分けて論じてきたが、その結果、両者の漢字、漢語の読みの違いは、それぞれの音韻構造の特色に由来するものであることがわかった。要するに、日本語と同じく、朝鮮語も、異質の中国原音をいかにしてその言語の音韻体系中に同化させるかという問題を中心として、各自の独自の漢語の読み方を確立してきたのである。この際、日朝両語に共通するのは、中国原音の音調を完全に排除したことであり、両者の最大の相違は、漢字を一字一音一音節に読むかどうかという点に存在した。朝鮮語の読みは、簡単に言えば、中国原音の音相に、日本語よりも、

もっと忠実であり、その反面 r 音の例に見られるように、固有の言語の性格を固執する側面もある。原音の音相に忠実であることは、朝鮮語の音韻構造がたまたまそれを可能にしたにすぎないから、要するに朝鮮語は漢語の読み方について、より保守的であると言えるであろう。

日本語と朝鮮語の漢字の読み方には、対応の通則があるように見えて、厳密には容易に確立できないといわれる。だいたいの対応傾向については、石原六三、青山秀夫共著「朝鮮語四週間」(1963, 大学書林) の巻末及び同共著「朝鮮語の学習」 pp. 155~6 に述べられているので、参照されたい。

この問題の解決には、日朝両語に漢字、漢語がとり入れられた時代の中国原音(呉音, 漢音, 唐宋音など)の研究及び日朝両語の古代, 中世における漢字, 漢語の読み方の研究が必要である。また問題を現代の言語に限って考えるときに、現代北京語の漢字の読み方も補助的な資料として役立つように思われる。更に歴史的仮名遣いによる漢字発音の表記も、朝鮮語の漢字読みの推定に役立つところが大きいと考える。(例) 甲 カフ /kap/, 答 タフ /tap/, 刀 タウ /to/; 為 キ /wi/, 以 イ /i/ など。

いずれにせよ、漢語が朝鮮語の語彙構成の中で圧倒的比重を占めているにもかかわらず、現在の朝鮮では南北ともに漢字を使用しない方針を進めているので、朝鮮語及び朝鮮事情を研究する日本人にとっては、朝鮮式の漢字、漢語の読み方についての知識が、きわめて重要であると考え次第である。

(1970年9月)

〔参 考 文 献〕

（辞書）

- 天理大学朝鮮学科研究室「現代朝鮮語辞典」1967, 養徳社
宋枝学「朝鮮語小辞典」1962, 大学書林
宋枝学, 孫晋滢「日朝小辞典」1966, 大学書林
梁柱東, 閔泰植, 李家源「漢韓大辞典」1963, 東亜出版社, ソウル
梁柱東「Tong-a Sae (東亜新) 国語辞典」1965, 東亜辞典出版社, ソウル
朝鮮民主主義人民共和国社会科学院言語学研究所「現代朝鮮語辞典」1968, 平壤 (1969
翻刻, 学友書房, 東京)
西尾実, 岩淵悦太郎「岩波国語辞典」1963, 岩波書店
鐘ヶ江信光「中国語辞典」1960, 大学書林

（学習書）

- 石原六三, 青山秀夫「朝鮮語四週間」1963, 大学書林
石原六三, 青山秀夫「朝鮮語の学習」1969, 改訂版, 養徳社
宋枝学「基礎朝鮮語」1957, 大学書林
宋枝学「日朝会話練習帖」1958, 大学書林